



Data

監督: 成島出
 脚本: 平松恵美子
 原作: 南杏子『いのちの停車場』(幻冬舎文庫刊)
 出演: 吉永小百合 / 松坂桃李 / 広瀬すず / 南野陽子 / 柳葉敏郎 / 小池栄子 / 伊勢谷友介 / みなみらんぼう / 泉谷しげる / 森口瑤子 / 中山忍 / 松金よね子 / 小林綾子 / 菅原大吉 / 国広富之 / 西村まさ彦 / 石田ゆり子 / 田中泯

👁️👁️ みどころ

東京五輪開催を2か月後に控えた今、日本の“ワクチン敗戦”は明らかだ。その責任の第1は政府の対応に、第2は医療体制（の不備）にある。ワクチンの打ち手を巡っても医師会の問題点が明らかだが、なぜそんな根本問題にメスが入らないの？

62歳にして、東京の救急救命センターから金沢の「まほろば診療所」の在宅医に変身。その理由は？“終末期医療”とは？“在宅医療”とは？新旧の年収の差は？

今や“最後の映画スター”ともいえる吉永小百合作品には、いつも“優等生”ばかり集合。それは宿命だが、“理想的な奴”ばかりが集まれば必然的に終末期医療、在宅医療も良い結末に！？それも悪くはないが、“安楽死”を巡る父娘の確執について、成島出監督の「ラストシーンは、観てくださる方に委ねたいと思っています」は少しずるいのでは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 122本目で初の女医役に！父親との年齢差は？ ■□■

“サユリスト”の私が「スカパー！」e2byスカパー！」の『祭りTV！吉永小百合祭り』にゲスト出演したのは2008年10月。吉永小百合が113本目の『まほろしの邪馬台国』（08年）『シネマ21』（74頁）に出演した時だった。女優・吉永小百合の転換点となったのは、高倉健と共演した『動転』（80年）だが、それから既に40年。出世作となった『キューポラのある街』（62年）から数えると60年だから、時が経つのは早い。

南杏子の原作で描かれた、金沢にある「まほろば診療所」の在宅医・白石咲和子（吉永小百合）の設定は62歳。本作導入部は、東京の救急救命センターで救急医として働く咲和子が“ある事件”の責任を取って退職し、故郷の金沢に戻るシークエンスから始まる。娘が戻って

来てくれたため、父親の白石達郎（田中泯）が嬉しそうに咲和子を金沢駅で出迎えたのは当然だが、仙川徹（西田敏行）が3代目の院長を務めている「まほろば診療所」の在宅医への転職は、医師の出世レースとしては明らかに敗北。年収がいくらに減ったのかは明らかにされないが・・・。

それはともかく、1949年1月26日生まれの私は今年72歳を迎えた。それなりに元気なつもりだが、2015年9月の大腸がんの手術、2016年11月の胃がんの手術等を経て、いろいろとガタが来ていることは認めざるを得ない。しかし、1945年3月13日生まれの吉永小百合は元気いっぱい。というより、若さも美しさもいっぱい、今の御年76歳とは到底思えない。ちなみに、本作で父親役を演じた田中泯は1945年3月10日生まれで吉永小百合とはたった3日しか誕生日が違わないのに、本作の田中泯は87歳の父親役だから、その扱いの差にビックリ！

■□■コロナ敗戦、ワクチン敗戦はなぜ？日本の医療体制は？■□■

中国と比べても、米国や英国と比べても、日本が“ワクチン敗戦国”となったことは間違いない。そもそも、新型コロナウイルスの感染者が欧米とは2桁も違うのに、なぜ早々に病床が逼迫し、医療体制が崩壊してしまうの？そもそも、国民皆保険の制度まで完備させている日本は、医療技術においても医療体制においても、世界のトップクラスではなかったの？そんな疑問と怒りは連日のコロナ報道で増幅されていったが、①医療体制の問題点、②病床不足の問題点、③民間病院・公立病院の在り方、医師の配置の在り方の問題点、④圧力団体としての医師会の問題点、等々に本気でメスを入れる専門家、コメンテーターは橋下徹弁護士（元大阪府知事・元大阪市長）等、ごく一部を除いてほぼいなかった。

ちなみに、自衛隊の投入という大決断の中、東京・大阪での65歳以上の高齢者への大規模接種がやっと始まったが、自治体ごとに行う接種は遅れ気味。大阪市でもワクチンの“打ち手”として医師を募集しているが、その日当はHow much？6月1日付産経新聞夕刊は、一方では任務に当たる医官・看護官の手当では「1日3千円」、「災害派遣などの日当1620円を参考に、作業の特殊性を加味して決めたという」と紹介し、他方で「大阪市が運営する大規模接種会場（インテックス大阪）で接種を行う医師は日当10万5千円（日曜日12万円）で集められた」と比較して報じているが、なぜマスコミはそういう問題点を明示しないの？

また、ワクチンの量は確保できても、1日100万回接種を標榜する菅首相は、その“打ち手”をどう確保するの？それを巡っては当初、歯科医師が、それに続いて救急救命士や臨床検査技師が候補に挙がったが、それに反対したのは一体ダレ？その反対の理由は一体ナニ？そんな現実を目を向ければ、日本の医療体制の根本問題や医師会の問題点等が見えてくるはずだ。

■□■咲和子先生の転職は敗北？彼女は脱落医師？■□■

2010年の『孤高のメス』（10年）（『シネマ24』80頁）で臓器移植問題に鋭いメ

スを入れた成島出監督は、2017年に自ら肺がんの手術を受けたことによって、さまざまな医療の問題点に向き合ってきたらしい。そして、南杏子の原作と出会い、更に医師役をやってみたいという“76歳のマドンナ”からの希望などが交わる中、本作の企画が動き始めたようだ。

咲和子はもともと東京の大病院の救急医だから、超エリート医師。できればその年収も明示してほしかったが、定年を迎えれば一体いくらもの退職金をもらい、次はどんな優雅なポストに就くの？順調にいけば、彼女はそんな立場の医師だが、本作では部下の1人だった野呂聖二（松坂桃李）がいらざることをしたことについて、病院側はメンツを守ろうとしたため、咲和子はそれに盾ついて退職することに。もっとも、この程度の問題でいちいち退職していたら、すでに何度も辞表を書いていたはずだ。ちなみに、『ドクターX〜外科医・大門未知子〜』シリーズ（19年）での「私、失敗しないので！」が口癖（？）の、米倉涼子演じる女医・大門未知子の強気一辺倒の権威への抵抗の演技は面白いが、あれは若さの表れ。それに対して、62歳の咲和子が本作導入部で見せる啖呵はカッコいいものの、あれは現実にはあり得ないもので、映画だけの世界だ。

それはともかく、本作導入部に見る医療体制の問題点は、まさに今回“コロナ敗戦”と“ワクチン敗戦”を迎えた日本国の医療体制の問題点を示していると言わざるを得ない。

■□■終末期医療、在宅医とは？訪問看護、地域医療とは？■□■

私は南杏子の『いのちの停車場』（幻冬舎文庫刊）を知らなかったが、パンフレットでは同作を次のように紹介している。すなわち、

ある事情から、38年間務めた救急医を辞めて、故郷・金沢の「まほろば診療所」で訪問診療医となった62歳の咲和子。87歳の父との限られた時間を過ごしながら、在宅医療の現場で彼女が直面した、老々介護や終末期医療、積極的安楽死の問題など、医療の現実に向き合う人間ドラマ。

松山の実家で1人で過ごしていた私の父親は2017年2月20日に102歳で他界したが、私はその世話を全くしていなかった。そのため、私は“在宅医療”のことを全く知らなかったが、本作は「ケース1 末期の肺がん患者」、「ケース2 脳出血で入院後、在宅治療をする胃ろう患者」、「ケース3 脊髄損傷の四肢麻痺患者」、「ケース4 再発したがん患者」、「ケース5 末期のすい臓がん患者」、「ケース6 小児がん患者」、「ケース7 骨折をきっかけにドミノ式に病に冒される老人」が登場し、咲和子がそれぞれのケースでいかに患者と向き合うのかが描かれるから、それをしっかり鑑賞し、“終末期医療”、“在宅医”とは、“訪問看護”、“地域医療”をしっかりと学びたい！

■□■新米医師は金沢のまちを自転車です！■□■

私は昔から金沢のまちが大好きで、よく訪れていた。そんな中、たまたま金沢の法律事務所で弁護士として働いていた娘が金沢の弁護士と結婚し、夫の両親の近くで生活することになったため、金沢はより身近な街になった。金沢は、兼六園とそのすぐ隣にある金沢

城公園が有名だが、近江町市場にはおいしい海の幸がいっぱいあるし、ひがし茶屋町や主計町茶屋街も情緒がある。さらに、長町武家屋敷跡界隈やし茶屋町には、“加賀百万石”の歴史を残す、美しい佇まいの街並みが残っている。

本作が『いのちの停車場』とタイトルされたのは、第一義的には在宅医・咲和子の職業上の意味だが、副次的には彼女・咲和子が生まれ育った実家が、かつて路面電車の停車場だった井原台駅の近くにあるためだ。さすがに路面電車は廃止されているが、この井原台駅は今なおバス停として利用されているらしい。本作のパンフレットには、この井原台駅という停車場や「まほろば診療所」、「BAR STATION」をはじめとして、さまざまなロケ地について興味深い「Production Note」があるので、それは必読！

「停車場」とは何ともなまめかしい響きの言葉(?)だが、私たち団塊の世代の男は、「停車場」と聞けばすぐに、奥村チヨが歌って大ヒットした「終着駅」を思い出すはず。「落葉の舞い散る停車場は、悲しい女の吹きだまり」の歌詞から始まるこの歌は、「一度離れたら二度とつかめない、愛という名のあたたかい心の鍵は」というラストの歌詞の“世界観”を歌ったものだが、本作の停車場はどんな物語の舞台になるの? その1つは、父親が語る、咲和子が子供の頃、雨が降ると子供を抱きかかえた妻が停車場まで迎えに来てくれた、という思い出話。誰にもそんな忘れられない子供時代の思い出があるはずだが、本作のそれは、ぐっと心に迫ってくる。もう1つは、この停車場とその周辺が、かつて咲和子の隣に住んでいたという中川朋子(石田ゆり子)と咲和子との数日間の語らいの場になること。がんを患い、5年前に手術をしたが、再発が見つかった朋子は、幼馴染の咲和子を頼って「まほろば診療所」にやって来たわけだ。そして、咲和子と朋子しかわからない子供時代の懐かしい場所を歩きながら、いのちの重さについて語り合う中で、朋子は最先端の治験にチャレンジするという重大な決断を下すことに。

■□■仙川が理想的な医師なら、野呂も理想的な若者■□■

『敦煌』(88年)で精悍な漢人部隊の隊長役を演じた西田敏行も、今や好々爺の役がピッタリ似合う年齢に。「まほろば診療所」は原作者・南杏子の体験に基づく設定だろうが、医師としての理念や病院経営の在り方はもとより、人柄、雇用姿勢、更には「BAR STATION」との付き合い方等、この医師はすべての面で理想的! それとはもかく、『釣りバカ日誌』シリーズ(88年)の浜崎伝助役では、三國連太郎演じるスーさんこと鈴木一之助の地位と経済力に頼りっぱなしの西田敏行が、本作では「BAR STATION」で食事しながら咲和子から日常業務の報告を聞くだけの3代目のオーナー院長ながら、62歳にしてなお在宅医として進歩し続ける咲和子を温かく見守る、理想的な医師役を演じているので、それに注目!

他方、本作では導入部で医師でもないのに医療行為をした責任を取られようとしていた若者・野呂が、真っ赤なベンツに乗って、「まほろば診療所」での勤務を始めた咲和子を尋ねたところから本格的なストーリーが始まっていく。野呂は、医大を卒業しながらなか

なか医師国家試験に合格できないそうだから、かなりの劣等生。なるほど、それはこの真っ赤なベンツへのこだわりを見ているとよくわかる。そう思っていると、意外にも、この若者も理想的な若者だ。『孤狼の血』(18年)、『シネマ42』33頁)では、「警察じゃけえ、何をしてもええんじゃ。」とほざく、役所広司扮する先輩刑事に圧倒されていたが、広島大学を卒業して刑事になったため「ヒロダイ(広大)」と呼ばれていた若造刑事もそれなりの役割を果たしていた。その「ヒロダイ」を演じていた松坂桃李は、8月20日に公開される『孤狼の血 LEVEL2』では、先輩を超える悪刑事役を主役で演じるらしい。そのチラシでの彼の姿を見ると、髭ボーボーのサングラス姿がよく似合うが、そんな松坂桃李が本作では吉永小百合映画の共演者として、とことん“理想的な若者”、野呂役を!

医師国家試験に受かるかどうかと、死に直面している末期がんの子供やじいさんたちとどう向き合うかは別問題。それは当然だが、ここまで他人の気持ちや痛みが理解でき、適切な行動がとれるのなら、医師国家試験くらい簡単に受かるのでは?「まほろば診療所」で看護師をしていた姉を交通事故で失った妹の星野麻世(広瀬すず)は、その後一念発起して看護師試験に合格し、今は「まほろば診療所」の訪問看護師として仙川院長と二人三脚で頑張っていたのだから、その励ましを受ければ、再度の医師国家試験に合格することくらい朝飯前。

■□■ケースそれぞれの、医師と患者の姿(物語)に涙!■□■

私は成島出監督の『八日目の蟬』(11年)、『シネマ26』195頁)が大好き。同作の問題提起は鋭かった。また、『孤高のメス』もタイムリーな社会問題提起作だった。そんな成島出監督だから、本作のケース1~7で描く個々のエピソードは、それぞれ現在の在宅医療の問題点、限界を示しながら、それぞれ説得力のある展開を見せている。

ちなみに、脊髄損傷の四肢麻痺患者・江ノ原一誠(伊勢谷友介)が見せる「ケース3」の最新医療と最先端治験へのチャレンジは多少誇張気味だが、逆に前述の再発したがん患者・中川朋子の「ケース4」は、最新医療と最先端治験へのチャレンジが裏目に出る悲しいケースとして対比されているから、それに注目!また、末期の膵臓がん患者・宮嶋一義(柳葉敏郎)の「ケース5」では、突然野呂が長年会っていない息子役になり切って、死に際にある親父との涙のシークエンスを展開していくので、それに注目!これらの「ケース」を、咲和子はすべて野呂と星野の協力を得ながら進め、その中で、それぞれがそれぞれ成長していくわけだ。

■□■父親との約束の重さは?安楽死の要件は?その実行は?■□■

それに対して、「ケース7」の、骨折をきっかけにドミノ式に病に冒される父親・達郎と咲和子との向き合い方は如何に?なぜ、ここに野呂と星野が登場しないのかは疑問だが、きっとそれは“安楽死”というテーマがあまりに重く、かつプライベートな問題であるため。父親と娘との間の“安楽死”の約束は、咲和子が金沢に帰って来てからすぐに交わされていたが、現実には達郎が大腿骨骨折をし、誤嚥性肺炎、脳梗塞による半身麻痺にむしば

まれてくると、いよいよ現実の課題になってくることに。咲和子は毎日忙しいのだから、当然「まほろば診療所」全体としての訪問看護の対象とすべきだが、いよいよすべての治療が限界だと悟り、達郎から約束の履行を迫られた時、さて、咲和子はどうするの？そして、本作はそれをどう描くの？

そう思っていると、「BAR STATION」で深刻な顔つきの咲和子の相談を聞く仙川の態度は少しいい加減・・・？プロの女流囲碁棋士である中川朋子が死亡したショックで打ちひしがれる咲和子を抱きしめ、力づける姿にはさすが経験豊富な「まほろば診療所」の3代目院長と感心させられたが、ここでの“安楽死”を巡る対応は全然サマになっていない。ちなみに、西田敏行は「Interview」で「咲和子先生の結論は、当然だろうと思いました」、「でも、安楽死がいいとか、自然死でなければ駄目だとか、そういうことを決めつけた教条的な映画ではないので、この映画をきっかけに、安楽死についても考える機会を作っただけなら、という思いです」と語っているが、これでは安易すぎるのでは？

“安楽死”は刑法上の殺人行為。それは現行法制上ははっきりしているが、他方、「安楽死」を決めるための4つの要件もはっきりしている。それは、①患者が耐え難い肉体的苦痛に苦しんでいる、②死が避けられず、死期が迫っている、③肉体的苦痛を除去・緩和するために方法を尽くし、ほかに代替手段がない、④生命の短縮を承諾する患者の明示の意思表示がある、の4つだ。さあ、成島監督は、本作クライマックスでそれをどう描くの？

■□■咲和子は父親とどう向き合うの？その描写は肩透かし！■□■

それを期待していたが、本作の結末はアレレ・・・。本作のクライマックスは私にはかなりの肩透かしだ。パンフレットの「Director Interview」で彼は「ラストシーンは、観てくださる方に委ねたいと思っています」と語っているが、こりゃハッキリ言って“逃げ”なのでは・・・？

さらに、吉永小百合本人も「Interview」で「最後の仙川先生とのシーンでも、咲和子は、そこで何かを決意したのではない。仙川先生のあたたかい声を背中に受けて、自分自身でさらに深く考えなくてはという気持ちで、『BAR STATION』を後にしたような気がしました」と語っているが、これもハッキリ言って“逃げ”なのでは？

父親のベッドの部屋に朝日が差し込む最後のシークエンスは美しいが、いくら何でもここまで観客に委ねるのは如何なもの・・・？私はそう思うのだが・・・。

2021（令和3）年6月7日記